

読んだ本 (松田素子／文 川上和生／絵 桜木晃彦／監修) 講談社

## 「ながいながい骨の旅」

中華人民共和国日本国大使館附属北京日本人学校三年

別府<sup>べっふ</sup> 里桜<sup>りお</sup>

「ながいながい骨の旅」を読んで

ほねが旅をするってどういうこと？

わたしは、この本の題名を見て、そう思いました。本の表紙を見ると、見たことのない生き物の絵がたくさんかかれていて、おもしろそうだと思ったので、この本を読んでみました。

生き物ははじめ、海の中にいました。生き物はかんきょうに合わせて、りくにすむことができるようになりました。その中でほねは、体をささえるやく目や、体の大切な部分をもるためのいれ物のやく目を

するようになりました。わたしはこの本で心にこった言葉は「血」というかたちで、いまも、体の中に海をいれて、もちろはこんでいる。」です。海と血には、

どちらも生き物にとって大切なミネラルがふくまれているというきょう通点があります。血はほねから作られるので、ほねのやくわりによつて、生き物が海から出てりくでくわせようになつたと分かり、わたしはおどろきました。また、おもしろい表げんだと思いま

した。今、地球温暖化がすすんで、気温が高くなつたり、大雨がふつたりしています。これまで、かんきょうによつて生き物が形をかえてきたように、人間もこれからほねの形をかえていくかもしれないと思うと、わくわくしてきました。「ほねが旅をつづけている」という言葉のとおり、生き物がこれからどんな旅をつづけるのか、わたしは楽しみにしています。